令和５年度第４回島根県総合教育審議会

日時：令和５年１０月１７日（火）

９：３０～１１：３０

場所：ホテル白鳥　鳳凰の間

○会長

第１回の審議会で教育委員会のほうから諮問をいただきましたので、この諮問に対する答申の形をまとめるというのがこの４回の審議会のミッションでございます。前々回、第２回は江津の地域の当該高校の方々や地域の方々から御意見をいただき、それを基に議論をさせていただきました。第３回、前回のところでは、新設校の学科とか定員とか、普通科系と工業科系をどういうふうに配置するのかといったようなこと、それから、新たな魅力として何が考えられるのかといった教育の中身について、様々な御意見を賜ったところでございます。

前回の議論について、論点を少しまとめたものを事務局のほうで資料として本日作成をいただいております。私と事務局のほうでも何回か打合せをさせていただき、少し修正もお願いしたところがございますので、事前にお配りしたものとは、本日手元資料が少し変わっているところもあるかもしれません。

それでは、事務局のほうから、資料に基づきまして、主に学科や定員のところを中心になると思いますけれども、お話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○事務局

それでは、よろしくお願いいたします。お手元の資料を御覧ください。１ページ目に、前回、第３回の審議会での議論の概要について、（１）から（３）の形でまとめさせていただいておりますので、御報告いたします。

（１）学科設定と定員のバランスについて。ポツが７つありますが、最初の４つのポツ、江津高校の入学者数はここ数年６０名前後を維持しており、普通科系の学び４０名とするのは無理があるのではないか。地域の普通科のニーズ、子どもたちの普通科のニーズに対応する必要がある。江津工業高校は、ここ数年４０名から５０人程度の入学者である。２学級６０人とすることで、ゆったりとした定員設定で少人数指導が可能である。２つの高校が統合されるときには、対等性というのも大事な視点である。その下の２つのポツ、一方で、教員配置を考えると、普通科系１学級、工業科２学級をベースに考えるのがよい。

普通科系１学級、工業系２学級のほうが産業界のニーズに応えられるのではないかという意見がございました。最後のポツで、今回は、基本的な方針（案）をベースにしたものと、そのときの案１の２案に絞って検討をしようというまとめをいただいております。

（２）学びの内容についてです。１ポツ、２ポツ合わせてですけども、普通科系の学びには、総合学科等の可能性も考えられる。工業科の学びにも探究的な学びが必要。それから、３ポツ目、４ポツ目を合わせてですけども、県立大学やポリテクカレッジ、指定校的な学びの枠を広げることも学びの魅力につながる。また、これらの連携にコンソーシアムが加わり、地域に活動が広がるとよい。最後の２つのポツですけども、子どもたちを育てるという視点から地域の意見、それから中学生の意見を聞いて設定する必要があるということの御意見をいただいております。

それから、（３）検討に向けた要望ということで、１ポツ目、普通科、工業の枠にとらわれず、入学した生徒が柔軟に進路を選択できるような方法がないか検討できるとよい。２ポツ目、中学生に学校や学びの魅力を伝えるために学科の名称も工夫する必要がある。３ポツ目、学びを充実させるための教員配置を検討する必要がある。４ポツ目、女子生徒が進学したくなるような学びの工夫が必要。５ポツ目、支援が必要な生徒への対応を考えておく必要があるということでございます。

（１）の一番下にある２案についてですが、次のページ、２ページ目で、本日の協議資料として、１案、２案、学科設定と定員のバランスについて記載してございます。学科、コースの名称については、魅力あるものにという御指摘をいただいておりましたけども、案１、案２の形は検討段階ということで載せていることを御了解いただければと思います。案１、案２、共に想定される学びというところを御覧いただいて、想定される学びで、進学を念頭に置いたものが２つ、文系進学コース、看護、保育などの資格職を目指す進学コース、それから、工業科のほうが、機械、ロボット、建築、電気とした６つのコース、これを２０人ずつと想定したところで、案１のほうで、進学を念頭に置いた普通科系の学びのほうで１学級４０名、工業科のほうで２学級８０名とした案１でございます。

それから、下の段は、案２ということで、普通科、工業科とも６０人２学級とする案でございます。進学を念頭に置いた普通科系の学びというのは、文・理の進学、それから、地域課題を探究し進学を目指すコース、それから、資格職を目指す進学コースという２学級の６０名、工業科のほうは、機械、ロボットも含めたものになるかと思うんですけども、機械系、電気系、それから建築土木系ということで、２学級の６０名という形での設定。

この場合、前回の審議会で教員数が話題になりました。上の案１でいうと、２５名から３０名の間での教員設定になろうかと思います。それに対して下の案では、普通科系の学校規模と工業系の学校規模では、工業系の学校規模のほうが配置教員数が多いため、第２案のほうでは教員数が２から３程度の減が見込まれると、想定されるというようなことを御説明させていただいたところです。

３ページ目を御覧ください。諮問でありました設置校の場所、それから、開校時期について、改めてポツが２つで記載しております。１つ目のポツは、新設校は江津工業高校の場所を念頭に、これは施設・設備の活用を考えてあることからです。

２つ目のポツ、開校する時期は、教育課程の検討と、それを踏まえた施設整備のため、令和１０年度前後を想定という形で諮問させていただいています。

４番目は、前回の委員会でも記載しております留意事項です。１ポツ目、方針の決定に向けては、パブリックコメントを実施するなど、地域の声を聞く機会を持つ。２ポツ目、今後、学びの内容を具体的に検討する際には、生徒や地域の中学生の意見も踏まえる。３ポツ目、開校まで、または開校後であっても、地域や社会のニーズを捉え、時代に合った魅力ある学びとなるよう柔軟に対応し、必要があれば方針等を見直すという形で御協議をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○会長

ありがとうございました。

前回の主な論点をまとめていただいたという形になってございます。皆さんのほうから何か質問や、こういう点が落ちているということがありましたら、まずお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。ほぼこういう内容であったように理解しておりますが、また今日、落ちているところで大事なことがあったら言っていただければいいかなというふうに思います。

そうしましたら、どこからというわけではないんですが、基本的には２ページ目の案１、案２のどっちにしましょうか的な話に最終的にはなるとは思うんですけれども、それも踏まえながら、皆さんのほうからまずは自由な御意見をいただきたいというふうに思います。案１、案２どっちにしましょうか的な話は最後にさせていただくようにして、それを踏まえながらの意見ということでよろしいかと思います。いかがでしょうか。

○委員

お願いします。今、進学を目指すときに、文系であっても理系であっても、工業科では

ないほうに分類されている形になると思うんですけども、これは、工業がベースの科では進学を目指すということが難しかったという解釈でいいですか。それとも、工業科のほうに進学を目指すコースということも立ち上げることが選択肢としてあり得るかどうか伺いたいです。

○事務局

例えば、令和５年度の江津工業高校の進路といたしましては、３分の１が進学、それから、３分の１が県外就職、３分の１が県内就職というような形になっています。令和５年度は、こうやって県内、県外の就職の割合が半々だったんですけど、それ以前はやはり県内のほうが多いような比率になっています。

御質問の工業系のクラスからの進学は、現在も多方面への進学、工業系への進学、それから、専門学校への進学等ございますので、決して進学がないというわけではなく、普通科系の学びのほうに主に進学を念頭に置いたというところをつけている関係で、下に進学がないようには見えるんですが、そんなことはございませんので、カリキュラムとか詳細検討をする際に、場合によっては進学コースなども学びの選択肢としては準備できる想定はあります。

○委員

ありがとうございます。意図は、工業科のほうを増やすほうが教員の人数が増えるというお話の流れなんですけども、なるべくいろんな学生のニーズに応えた工業科の内容というところがあるといいと思いまして、進学をするんだったら、もう自動的に工業科ではないとならないで、工業系のことに興味があるんだけど進学に頭が向いているという人を工業科に取り込む一つのツールとして、この工業科のほうに進学コースということを前面に出したほうがいいんじゃないかという意見です。

○会長

ありがとうございました。

現在、ポリテクカレッジのほうに進むことについては、進学という捉え方でいいんですよね、工業のほうからね。昨年度はないようだけど、その前は１人とか２人とかいう人数がポリテクのほうに行っているということで、これまでも進学はあるにはあるということ。大学進学ということになると、ちょっと江津工業は弱いところがあって、松江とか出雲に比べて少し大学への進学は、現在のところまでは少ないということはあるかもしれません。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

高校の対等性を確保するということについて、すごく御配慮をされている案だなと感じました。その中で、第２案のほうの工業科のほうの建築土木なんですけども、上のほうの普通科のほうで、地域課題を探究した進学ということになっているんですけど、今は本当に、地球が、もう温暖化を越して沸騰化といわれるこういったときに、本当に自然災害がすごく多くて、もしかしたら子どもたちもそこに直面していて、いろんなことを体験して今、生活、生きているわけですので、ここに、上と一緒のように危機感を、地球規模での何か危機感を抱きながらそういった勉強をしていくというか、勉学に励む、そういうような文言をちょっと入れたら、その中で自分たちはどういうふうにこれから生きていくか、そのためにはこの科でどうすればいいかと、何か、生きていくための、そういったような文言が、上と一緒のようにできたらとても魅力的だなと思って感じました。

○会長

現在のこの案は、真ん中の想定される学びのところは、１つのポツについて２０人の人数を想定しているということで、上の案では２０掛ける２とか４とかっていうのになっていて、下の案では２０掛ける３ずつという、そういう想定になっているということなので、コースの名前としてそういうふうになっている。ただ、実際には２０人定員で取るかどうかも分からないし、その辺りは、人数の外枠だけ決めて、あとはどういうふうにするかということについてはまた検討すればいいかなというふうに、今、暫定的に、そういうふうに人数との関係を置いているんだというふうに理解をしております。

前回、○○委員さんからもあったように、実際のところは、人数は結構ばらばらですよみたいなお話もありましたので、その辺も踏まえながらということになると思いますね。

今、○○委員さんからあったのは、現在どうこうということよりも、将来にわたって、これから環境という問題を考えることが工業の学生にとっても絶対に必要なことなので、そういったことについては、例えば共通科目とか、そういう動き方もできると思うし、そういう環境についての意識が高い工業系という考え方はあるんじゃないかという御指摘だと。これは別に普通科も同じだと思いますけれども、現在、ＳＤＧｓの教育に取り組んでいるところなので、その辺を一つのベースにしましょうという御提案だというふうに思います。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

冒頭の〇〇委員の工業科からの進学みたいなところの話は、やっぱりすごく大事だと思っていて、これは、たしか第２回でしたっけ、江津地区の方が来られて、工業の出身の方がおっしゃっていたのが、やっぱりもう３年間の学びだけでは産業人材の育成というものがなかなか難しいと。もっともっと上級学校にというところがありましたので、ここは本当に、２つの、進学に重きを置いた普通科系の学科と工業が一緒になるということのメリットをうまく生かしながら、工業科からも学校推薦型選抜とかで大学進学を積極的に狙えるような、そういった進路指導、進路支援の体制をつくっていくというのは、何か、一つ、ここに載せるかどうかは置いといて、具体的に出していくときには前面に出したらいいんじゃないかなというふうには思ったので、やっぱり工業からの上級学校進学の体制が整っているというところは一つのポイントになるんじゃないかなというふうに思いました。

〇会長

ありがとうございました。

そこのところが、ある意味で見える化することが必要で、現在の工業の生徒の中にも進学する生徒はいるんですという話は理解できるんだけど、今の〇〇委員さんのは、そこが一つの魅力として、工業科の課程の中で見える化するということも必要なんじゃないかという御意見だというふうに思いました。

ちょっと本学のことを申し上げて何なんですけども、うち、材料エネルギー学部という新しい学部を立ち上げて、地域のためにということでやっているんですけども、そこに専門高校枠を設けています。あんまり多い人数ではないんですけども、その専門高校枠に送ってくださる専門高校が県内にどのぐらいあるかということに課題があると感じており、もう少し県内様々な高校から送られてくるといいなというふうに思っています。総合理工学部にも専門高校からの進学枠がありますが、そこについては複数の高校から来ていますし、ここ数年の間、少し増えてきているところもありますので、そういった意識で工業高校が指導しておられるなということは伝わってきているというふうに思っております。

ほかにいかがでしょうか。

〇委員

工業科に進学系の要素を加えたらどうかというお話なんですけども、じゃあ、具体的にどういった工業をどう、工業系のカリキュラムと進学系のカリキュラム、僕も具体的なことは分かりませんけど、同じクラスで工業系のカリキュラムと進路へ向けたカリキュラム、これを一緒にするというイメージですよね、同じクラスの中で。そうなった場合に、非常

にカリキュラムの内容が中途半端になるんじゃないかと。やっぱり自分は高校卒業後、就職をしたいと。そのためにいろんなテクニック、工学的な知識を吸収したいという動機を持った生徒もいると思うんですね。そこに自分と関係のない進学コースのカリキュラムが入ると、非常に限られたカリキュラムの中で、自分の専攻したいテクニカルな、工学的な分野が十分学べないと。非常に中途半端なカリキュラムになるわけですね。そういった場合、やっぱり地元の企業が求める中堅技術者のレベルに達しないと。だから、何か非常にどっちつかずの感じがして、工業系に入っても、一応、大学進学という選択肢も残しておくということだと思うんですけど、それだと非常に質が、教育の質が曖昧になるんじゃないかと。確かに選択肢は広がるんだけど、中身が非常に中途半端になって、何をしようとしている学校なのかよく分からないというところがあるので、そこは、やはりきちんと分けたほうが生徒のためになるのではないかと。例えば、工業系に入って大学に進学しますという生徒がいても、やっぱり大学が求める学力に達してないという子どもが入ってくる可能性もあるわけですね。だから、そこら辺のところをもう少し議論をしないと、非常に中途半端な学校ができるということを懸念しています。

○会長

ありがとうございます。

いろんな考え方があるんですけど、今、○○委員さんの御懸念もごもっともで、大学も学部つくったり学科つくったりするときに、文科省とやり取りする中で様々そういうところが議論になることがございます。一つは、やはり選択肢というんですかね、幹になるプログラムをしっかりさせるということと、それから、これ、クラスをかっちり分けるとかそういうことじゃなくて、選択できるプログラムを分けていくという形での対応というのが基本的なものだと思うし、それから、逆に言うと、１回入ってしまったらそこから抜けられなくてがちがちというのをつくってしまうと、非常に大きなミスマッチが起きることもあって、退学とか中退とかそういう問題につながっていくこともあって、今、大学もそれが一番懸念されていて、レイトスペシャリゼーションという言葉は、そういう意味で、やっぱり選択肢が先に向かって少し広がるような形でつくらないと、今の若者たちに、入口で入ったものをそのまま出口まで持っていけというのはかなり難しいところがあるというふうに関係者はみんな思っている。

だけど、○○委員さんがおっしゃることはよく分かって、かっちりしたプログラムのほうがとがった人材ができていくんじゃないかという視点なので、そのことは非常に大事だ

と思うんですけれども、今の学生さんたちの気質とか、現状の中退率とか休学率とか、そういうものを見ていると、やはりミスマッチの問題は怖いなと思うところもあります。その辺をどうするかっていうことでしょうね。

〇〇委員さん、何か付け加えていただくことありますか。

〇委員

ありがとうございます。

私が先ほど発言したのは、どちらかといえば、本当に最後、進路の選択肢の話であって、工業の子たちは当然工業を専門的に学んでいきます。ただ、先ほど会長もおっしゃっていた、先生の大学ではなかなかそんなに増えないんだ、専門高校枠がといったお話は、恐らく、工業の先生方がそういった選択肢があるんだということを知らなかったり、もしくは進路指導のノウハウというものが普通科高校に比べると少し足りない部分があって、なかなか積極的な選択肢として提示できないというところかなというふうに推察をするので、そういった意味では、この普通科系の学びのところでそういった進路指導のノウハウがあるんであれば、うまくミックスして、工業で専門的な学びをして、最後それを小論文や面接にどう落とし込んでいくかというときに、普通科系の先生のノウハウを生かしたらどうでしょうかというお話と、あとは、やはり、大学入学後、特に専門高校枠で入った子たちというのは、１年次の英語の授業であったりですとか、あとは数学の基本的な部分で結構つまずいて、さっき先生もおっしゃっていた早期退学につながるというケースがありますので、じゃあ、そういったところは、例えば、年内入試で合格が発表されてから普通科の先生を中心にちょっと集中的に補習をして入学後困らないようにしてあげるみたいな、そういったサポートはできるんじゃないかなというふうに思います。

〇会長

ありがとうございます。まさしくおっしゃるとおり。

ポリテクは、あそこは多分、課している教科が数学Ｉだったように記憶するんですけども。数学Ｉって意外と難しい教科で、土台のところができてないとなかなか上に積み上がらないというとこがあって、最後、３年生になって、じゃあこうしようみたいな話では間に合わないこともあるので、少しそういったところを普通科の力も使って、補習的に取り組んでいくということをやらないと進学者が増えないというのは確かなことだなというふうに思います。これ、キャリア指導ということと受験指導というのは、なかなか、重なっているようで違うので、その辺が難しいですよね。

○○委員がさっきおっしゃったのは、むしろキャリアとして中途半端になるんじゃないかという御意見だったので、そこを踏まえたカリキュラムの内容の検討ということは必要かなというふうに思いました。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

就職というか、自分がどうなっていきたいかというその子どもの考えというのは、やっぱり環境要因がすごく強いような気がしていて、多分、今まで工業に入った人たちがその先どんな道に進んでいったかというのは、もう地域に情報があって、何かノウハウがあるので、そのイメージがつくんだけども、進学って、今の企業の方たちがその４年間の学び、大学での学びも求めた、そういう、もうちょっと専門知識を高めた上で企業に入ってほしいというニーズがあったときに、ただ単にそういうコースを高校で立てるだとかということではなくて、先ほどの探究の、探究課題、地域の方々にも一緒に入ってもらって、コミュニティー・スクールみたいな形でカリキュラムを組むところから企業の方と相談するだとか、そんなような形で、何か子どもたちが進学するということを選択肢に持てるような形で環境を整えていくような仕組みが必要だと思っています。なので、この高校を選ぶ段階では、割と、先ほどおっしゃったとおりで、オープンな形で、進学するかどうか決めなくても入れるようなコースにしておいて、この高校の中で、もうちょっと知識について学んでいきたいだとか、テクニックのほうに学んでいきたいだとか、企業の方と話合いをする、地域の方のニーズを聞くというような形をプロセスの中に含めて、子どもたちがその先進学をするのか、それとも企業就職をするのかということを決めていけるような、そんな仕組みがあるといいんじゃないかなと思います。

○会長

ありがとうございました。

定員の問題にも少し近づかないといけないので申し上げるんですけども、現在、江津工業は５０人水準の人数ということになっていて、それを１案だと８０、２案でも６０というふうに引き上げる話になります。そうなったときに、やはり、これまでと同じような人材イメージで工業をつくっていくと、これ以上の人数は来ないと思うんですよね。やっぱり少し膨らませたイメージで進路が開けるという形にしないと、なかなか人が選択してくれないんじゃないかなというところもあります。

それから、また、今、○○委員さんおっしゃったように、あるいは○○委員さんがおっ

しゃったように、地域の企業さんが求める人材育成をするということは非常に重要な高校のミッションなんですよね。だから、そこのところで、地域の産業関係者の方がどういう人材を求めているかということも恐らくこれから変わっていく面もある。前回のお話では、結構国際的なことも強調されていたようなところもあって、そういう意味では、今ある産業、それをこなす既存の知識を身につけた人材というふうには決してお考えではないと思いますので、もう少しその先の発展を開発していけるような、そういう人材を育成するという目標を立てて人数を増やすというふうにしていくべきではないかなというふうに思われます。

○委員

人材についてなんですけども、江津市内の企業さんの話だと、やっぱり即戦力になる人が来てほしいっていうことを言われていました。ＣＡＤが使えたりとか、そういったものができる人が欲しい。一方では、そういうんじゃなくて、もう一からその会社に入って学んでいくという会社の方もおられます。進学にいたっては、会社によっては、会社が、企業が学費を免除するから、資格とか、卒業したときにはうちで働いてねというような、企業の方も進学に支援するという会社も実際あるようで、何ていうんですかね、働きながら学校に行くとか、そういったこともあるので、いろんな見方もあるし、それこそ工業にいたっては、私はちょっと詳しいことも言えないので、やはり、ちょっと工業の先生の過去の話とか、今どういうふうに思っているのかというのも聞いてみたいなというのは、正直私の思っているところです。

○会長

ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員

今、私もちょうど子どもが中学生であったりとか小学生であったりとかして、結構、中学生の子たちと話す機会とかあるんですけれども、その子たちと話ししているときに、高校を出てすぐ就職って考えている子が割と少ないなというイメージがあります。高校に行って、その後、大学ではないけれども、専門学校とかまで行って、ある程度資格を取ってから仕事をしたいんだみたいな話をする子が非常に多くて、それとは別で、何かいろんなことに特化して職人みたいなことになりたいという子もいたりはするんですけれども、全体的な感覚としては、高校の後にもう一つ何かしらの学校に行ってというふうな話をして

る子が非常に多いなというふうな感覚ではあります。

そうすると、昔は工業を出たらもう即戦力として就職という形だったんですけれども、そこまでは多くないのかなというふうな感じがあります。技術であったりとか資格であったりというのをしっかりと、今、江津工業さんなんかは結構いろんな資格をすごく挑戦されていて、取っているなというのは新聞とかでも見かけるんですけども、またさらにもう一個上の資格とかというとこも考えながらとか、別の資格も取りながらというところも結構視野に入っているのかなというふうに、今、子どもたちの話を聞くとそんな感じがあります。

普通高校に関しましては、もうほとんどそんな感じですよね。大学進学ではないにしても、進学という分類でいくとほぼほぼ進学という形になりますので、そこを含めて今の工業生のニーズも、すぐ職業に就くという子どもたちもいるかもしれないですけども、何かしらの資格を取ってからというとこもありますし、先ほども話が少し○○委員からも出たんですけど、職場としても育てていくというふうな意識を持っておられる職場というのが、結構、江津にもたくさん、江津だけじゃないんですけど、近辺にもたくさんありまして、来てから即戦力でもありがたいけれども、そこからさらに技術を身につけてもらうためにいろいろ資格を取っていただいたり、勉強に行っていただいたりという子もいるので、そういうとこを含めて、ちょっと、昔、私の時代も含めてですけど、工業を出たらすぐ仕事というふうな感覚は減っているのかなというふうな感覚は持っています。

○会長

ありがとうございます。

子どもたちもこの時代に生きているので、やはり自分のキャリアをどういうふうに形成するかということについていろいろ考えている、小・中学校を通してキャリア教育が行われているということの成果もあろうかというふうに思いますので、進路選択が一定の幅を持って可能な、そういう、もう普通科はもちろんですけども、工業科であってもそういったことは今後構想していかないといけないかなというふうには思います。ありがとうございました。

○委員

皆さんの意見、すごく、そうだなと思うこともたくさんあったんですけれども、私も、今の子どもたちって、何か夢とかが全然ない子たちが多くて、民生委員・児童委員をやっていまして、その中でゼロから１８歳対象とした主任児童委員をずっとやっているんです

けれども、やっぱり、何々になりたいとか、未来に向けてそういう発言が少なくなったなというのがここ最近思うことであって、高校の進路選択って、すごく何か、中学校の先生方があまりいろんな高校の特色を知らなくて、多分、中学校によって、この高校に行きなさいという、推薦じゃないけど、そういう中学校さんが結構大田市にはありまして、だからここの中学校はここの高校が多いとか、人数的なものがあったりとかするので、そういうのもあるのかなと思ったり、でも、こうやってコースがたくさんあったり、学びがたくさんあるってことは、人生の選択肢が増えてよいのかなとは思いますけど、うちの息子なんかも製造工場に勤めていますけれども、やっぱりきつい仕事というのがあって、それを親さんが求められない。うちの子にはそんなきつい仕事はさせたくないというのがあったりするので、何となく進学校へ進むという形のほうが、何か最近は多いかなと思いまして。だから、工業系の学びも、もっとやっぱり企業実習、校内実習じゃなくて、もう企業さんで、実際にこういうことやっていますというような実習を、企業実習というのを基本的にしたほうが、もっともっと工業的な分野に興味が持てる子どもたちが増えるのかなと思います。それは、小学校、中学校、遡って保育園の頃から工業系の学科を見せたりとか、生徒が出前授業じゃないですけど、そういうものもやったりして、工業ってこういう楽しみがあるよとか、楽しい仕事が待っているよみたいなことを学んでいけるような感じにしていけばいいかなと思いますけど。

〇会長

ありがとうございました。

すごく大事な視点で、何ていうんですかね、子どもたちを待っている場所は結構たくさんある、一方で子どもは減ってきているという、この状態を一回整理する時代に入ったなというふうには思います。大学の経営やっていて特にそういうふうに感じます。様々な学部がある、学科がある、こんなにたくさんありますよとやってきたのに、一方で子どもはがくっと減ってしまっている。その進路の指導というのは非常に難しくて、今、〇〇委員さんからあったように、中学校の先生方がどういう意識で高校進学を指導されるか、高校の先生方がどういう意識で大学進学を指導されるかということが非常に大きな、みんな親心でやるんでしょうけど、ある意味で非常にディレクションの強い指導をされることがありまして、なかなか難しいなというふうに私も思います。

今、ざっと一通り御意見をいただきました。かなり抽象的に開いた議論になってきましたので、少し資料に戻って絞り込んだ話にせざるを得ないので、そういう時間にしたいと

思います。

今、１番のところについて、第３回の議論の概要をなぞりながら、（１）、（２）、（３）、どれもお話が出たというふうに思いますので、そのことを踏まえて、２ページ目の学科設定と定員のバランスということで、本日はもう最初から案が２つになっておりますので、どっちでいきましょうかという話になります。先ほどからちょっと出ている想定される学びの中身の詰め方、普通科系のほうと工業科と呼ぶかどうかはともかくとして、工業科のほうの。これ、一応、２０人掛けるポツの数という形の定員設定になっているけれども、もう少し開いたほうがいいんじゃないかとか、中身を詰め替えたほうがいいんじゃないかという御意見もありました。ここは教育課程の問題になりますので、ここはちょっとさておいておきまして、取りあえず、普通科系の学びと工業科の学び、１学級、２学級の案１でいくのか、２学級、２学級の案２でいくのかというところで、ちょっと乾いた議論になりますけども、この辺について皆さんのお考えを聞かせていただければと思います。

教員の数については、ちょっと事務局でさっきちらっとおっしゃいましたけれども、前回のお話ですと、工業科のほうで人数が２０多い案１になっていますので、教員定数の関係からいうと、そちらのほうがやや多めになるんじゃないかという理解でよろしいですか。差としてはプラス２ぐらいの範囲ですか。（「２から３を想定しています」と呼ぶ者あり）２から３ということでございます。ただ、前回からちょっとありますように、これ、２つの別科を立てますので、それぞれの定員を張りつける必要がまずはあるけど、中でそれをどういうふうに運用していって、いい教育に生かしていくかという視点はまた別のものでございますので、これはこれとして考えられればというふうに思っております。

いかがでしょうか。

○委員

私はちょっと繰り返しになるんですけど、やはり教員足せば、全員が２５人から３０名の中で、プラス・マイナス２から３はやっぱり大きいんじゃないかと。なので、すみません、私は繰り返しの議論になりますけども、やっぱり教員の人数を確保するのが先じゃないかと思いまして、工業の中身のところは４つの学級だったり科があるんだけども、そこの内容は一部進学に向けたようなメッセージを送り出すだとか、ものづくりとはいえ、もうちょっと違う、例えば科学だとか、エネルギーだとか、ＩＴだとか、ロボットだとか、違うようなものの見せ方にするというような中身のとこを工夫することによって、やっぱ

り表で出すのは工業が２学級、だから１案のほうで、教員の人数を確保することを優先するものがいいんじゃないかという立場です。

○会長

ありがとうございました。言いにくいところを言っていただきまして感謝いたします。

○○委員がおっしゃったので、私は前回申し上げたように、こういった合併の場合に対等性という視点は非常に重要だというふうに思っていることと、それから、江津高校の現在の人数のことを考えると、それを４０に絞るという観点は、やっぱりどうしても無理があるということと、それから、現状の５０前後の工業の人数を８０にするということは、幾ら夢を描いてもちょっと難しい。プラス１０ぐらいがいいところではないかというふうに考えるので、そういう観点から私は案の２がいいんじゃないかというふうに、一委員として申し上げます。別にここに座っているから申し上げているわけではない。こうやって、案１と案２が割れると皆さんが迷うというふうに思って、それがいいんじゃないかなと思って、あえてじゃないんですけど、そういう意見の対立がありながら、皆さんがどうお決めになるかということで考えていければいいかなというふうに思っているところです。忌憚のないところを申し上げましたので、皆さんもお迷いになると思いますけれども、忌憚のないところで御意見をいただければありがたいです。

○委員

ありがとうございます。○○委員がおっしゃる先生の確保というところは、私もそのとおりだなと思いながら、少し先生という枠組みだけではなくて、やっぱり大人がこの学校に通う子どもたちにどう関わっていくかという視点で考えていくというのも一つ現実的な案としてあるのかなというふうに思うので、やはり私は１学級３０名のほうが、１人ないしはＴＴであれば２名の先生が３０人に、もしくは４０人になったときに、やっぱり３０名の生徒のほうがより目が行き届きやすかったり、学級運営なんかもしやすいのかなというふうに思いますし、そこで、当然、そうすれば案１よりは先生の配置は少なくなるというのが先ほど県教委のお話にはあったと思うんですが、そこの部分はコンソーシアムであったりですとか、前回の藤田さんのような、ああいった地域の方々を巻き込みながら、多くの大人たちで子どもを見守っていくという環境がつくれたらいいのではないかなというふうに思います。

○会長

ありがとうございます。

○委員

案２のほうで、地域課題を探究し進学を目指すコースとここ書いてあるんですけども、まず普通科系に入った子が、どこの分野に進学しようかなとか、何を自分、これからしようかという迷っているときに、地域の課題を探究していくと、もしかしたら自分のやりたいこととか、自分は、じゃあ文系に行こうかなとか、理系に行こうかなとか、それこそ工業系の大学に行こうかなとか、もしかしたら考えられるきっかけになるんじゃないかなと思います。地域課題を探究しというところで、地域の人と一緒になって問題を解決じゃないけど、問題点を挙げて、話をしてというふうにやっていくと、またちょっと探究活動とかそういうの、喜びじゃないけど、私はそういったのを、結構好きなので、いろんな探究じゃないけど調べて、地域の人と話をして、課題を見つけて解決じゃないけど、そういうのは生徒にとっても地域の方とのコミュニケーションを取ることでコミュニケーション能力も上がっていく、学んだことを発表することで、また自分にも自信がついたりできるのじゃないかなと思います。なので、私も案２のほうがいいかなとは思っております。

○会長

ありがとうございました。

先ほど、ちょっと私がうまく言えなかったんだけど、ここにポツで書いてある内容というのは、今後、教育課程の中で工夫が可能なところなので、案２じゃないとこれができないという話でもなく、案１の中にこれを取り入れることもできるので、冒頭のほうで○○委員さんからあったように、島根県の高校の教育の一つの魅力は探究というところなので、普通科に限らず工業科でもこういった探究的なところを大事にしていきましょうということは一つの核なので、それについては、別に人数規模にかかわらず、教育課程としては置けるんじゃないかと。今、たまたま、ポイントとしていえば、○○委員さんさっき言ってくれたんだけど、上の案ではやっぱり４０人１学級という考え方なんですね。下は一応３０人の２学級と、これ、３０人のというふうに学級規模が少し違っているので、この辺が一つの論点かなというふうには思います。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

なかなかやってみないと分からないというところはあるし、難しいところですよね。やっぱり現実とあんまりかけ離れたところからは出発したくないみたいなところがちょっと私の中ではあって、先ほど申し上げたのはそういうことで、現実により近いところから出発して、まずは一定程度の目標をしっかり満たしていく、１２０人をしっかり満たしてい

く方向になるように地元も努力していただいて、県教委のほうも魅力をつくっていっていただいてという形が、案２のほうがちょっと近いと。案１はちょっと現状から少し離れるので、そこを目標にされてもいいけど、なかなかそこに向かって、例えば、江津高校の関係者の方なんかが前のめりになれるかというと、ちょっと難しい面があるんじゃないかなと。人数を絞っておいて頑張れと言われてもとおっしゃるんじゃないかなと思って、ちょっとそこが嫌だったと。

それから、工業のほうについても、今の現状についてはほぼ倍にしろと言われているんだけど、倍でいけるのと言われたときに、その中身があるのかとなったら、もちろんそこに向かって努力はするんだけど、目標がちょっと遠いので、もう少し現実に近いところがいいかなというようなぐらいの感じで申し上げております。なので、いや、そんなことじゃ困るという意見があればどうぞ言っていただければというふうに思いますけど、いかがでしょうか。

○委員

現実的に考えれば、今の江津工業を志望する生徒さんの数とか、そういった現実の需要と、それから会長がおっしゃった、こういった学校統合に対してやっぱり対等性ということが非常に重要だと。そういった対等性、それから、地域の需要ですね。今、江津工業に８０人の定員を設けてもちょっと現実離れしているというお話で、そういったことを考えると、案２が、これが現実性、対等性、こういった要件を満たす案だと思っています。

だから、現実的には２案が妥当性が強いと思うんですが、その一方で、ちょっと理想論に傾くかもしれませんけど、今、石見部全体が非常に人口減で、どんどん県外に出ていって、人口が急激に減っていると。出雲は、今はそこそこ持っているんですけど、石見部の地域振興という面から考えると、やはり地元にいかに就職してもらうかと。これが非常に、今、喫緊の課題だと思うんですね。それで、教育と地域振興とを同列に考えるのはちょっと邪道かもしれませんけども、今、島根県の石見部が置かれた状況から見ると、やはり学校と地域振興とのリンクというのは、これはある程度意識せざるを得ないだろうと。教育は教育、地域振興は地域振興ときっぱりと分けて考えるほどの余裕は今の石見地域にはないという状況だと思っています。今日もああして地域創生という行政の最上位概念を掲げているわけですね。一生懸命、今、人口減に何とか打ちかとうとしています。ところが、現実はどんどん人口が減っていって、９月にはついに６５万人を切るという状況でして、そうですね、１９５５年ですから昭和３０年ですね、当時は９３万人いたんですね。それ

が今は６５万人という状況で、特に石見部が大きいと。そういった石見部の現状を考えると、何とか地域の産業界が求める人材を少しでも、１人でも増やしたいと。これはちょっと理想論なんですけどね。確かに、今の江津工業の入学生の現状を考えると、工業科を４学級８０人というのは、これはもう、ちょっと現実離れをしているということはよく分かるんですよ。ただ、そうは言っても、やはり理想というか、目標の旗はぎりぎりまで掲げておきたいという気持ちもあって、２学級８０人の子どもが集まるかどうかという問題もあるんですけど、例えば工業高校の８０人にした場合、当初は確かに定員割れを起こすと思うんですよ。恐らく、いきなり８０人ってことは、これ、かなりハードルが高いんで、当初は定員割れというのは、これは仕方ないと。ただし、８０人で運営していく中で、そこで工業科としての特徴を出していく。例えば地元企業との交流ですね、インターンをどんどんどんどん増やしていって、地元企業と高校生との交流を増やしていって、工業高校の子どもたちに地域の企業を知ってもらうと。それによって、地域の企業の魅力というか、それを知ってもらうと。それによって、これから工業高校に入ってくる人たちも、江津工業に入れば地域の企業といろんな面が見られるということで、評価が上がってくる可能性もあると思うんですね。ある程度期間を置けば。徐々に工業高校の入学生を増やすという選択肢も全く可能性としてはゼロではないと。今の島根県の置かれた状況を考えると、やっぱりそういう方向を目指すべきではないかというふうに思っています。

○会長

ありがとうございました。

最終的に１だったか２だったかがよく分からなくなってきて。理想的ではあるけど、１も捨て難いというふうにおっしゃったということですよね。（「はい、はい」と呼ぶ者あり）ありがとうございました。

○委員

私は本当に基本的なことが全く分からなくて、ちょっと躊躇する質問なんですけど、結局、クラス編制のときに４０人でもいいのか、３０人でもいいのかみたいなところが、基本的なことが分からなくて、じゃあ、少なければ少ないほどそこに先生が配置されるならそのほうがいいかなとも思ったりもするんですけれども、でも、これから、島根県は、もう本当に横に長いわけで、隠岐なんかの離島も含めた中山間地がある中で、これからは遠隔授業みたいなのもすごく必要なのではないかなと思ったりもしています。多様な生徒のニーズに対応するためにもそれが必要で、先生の質といいますか、人数がただおればいい

というものじゃなくて、やっぱりプロの、教員資格持ったらプロなんですけども、質の高いって、何かそういう授業をしていただくためには、そういう人を生み出していただくためには、やっぱりそういった遠隔授業も必要なのではないかなと思っています。

それから、今も増え続けて今後も増え続けるであろうと思われる、行きたくない子どもではなくて、何らかの事情で行けなくなってしまった子どもたちのために遠隔のそういった授業があれば、例えば病院であったり、家であったりしてもそれができるのではないかなと思ったりして、人数に特別、私は、ちょっとこだわることはどうかなと思って。ただ、私が分からない中で２案と言ったのは、吸収ではなくて対等な条件で対等合併ですというとこで、ただそのぐらいの理由で２がいいと思った次第です。

○会長

ありがとうございました。

ほかいかがでしょうか。

○委員

すみません、納得しました。案２のほうが現実的で、学生は集めてもなかなか来ないというところがあると、また別のレベルの苦労があるので、案２のほうで、私、○○委員さんがおっしゃるまで全然気づかなかったんですけど、４学級ということは、１クラスの人数が生徒数が少なくなって、これも大きいなと思いまして、ここを見落としていたので、そういう意味でも案２というところがよいというのは納得します。

○会長

２クラスで人数を絞ってきめ細やかな指導ができて、一人一人の子どもの可能性やニーズに対応できるというところを大事にしていただくというふうに考えたらいいかなというふうには思うところです。

案の２で対等合併をして、それぞれ現状に近いゴールを置いて、それを超えるような志願者を集めるということがまず一つの課題で、そこへ向かって地域の方々が努力していただくということ。これはもちろん地区の、中学校の方々も含めて努力していただいて、統合された一つの新設校に対して希望が集まるような、そういう学校にしていただくという方向がいいのではないかというふうに考えているところです。

それでは、案の２のほうで進めるということで、御納得いただけますでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、そのような方向にしたいと思います。

それでは、３分の３ページのところ、最後に、新設校の場所と開校時期が、ここはあまり議論してこなかったんですけれども、これは大事なことではありますので、ここについて、御意見があれば伺いたいなというふうに思っています。これはむしろ難しい問題かもしれないんですが、いかがでしょうか。

○委員

新設校をどっち置くかというところに関しては、やはり工業の設備とか施設考えると江津工業のほうになるんじゃないかなというふうには思うので、書いてあるとおりかなというふうに思います。

このページには記載ないんですが、今後の検討に当たって、一つ結構大きく変わりそうだなと思うのは、この普通科系の学びというものを、結局普通科にするのか、総合学科にするのかというところも、結構、今のところこういう意見もありましたってことで書かれているので、ここ結構大きな分かれ目になるかなというふうに思います。

いわゆる総合学科というのは、基本的には子どもたちが自分で受ける授業を選んでいくような形。ただ、今回のケースですと、ある程度、進学を目指すコースとか、ある程度コースはあるので、縛りがありながらも、その中で子どもたちが自由に選んでいけるのが総合学科だとしたら、普通科というのは、もうそれぞれのコースで決められたカリキュラムが設定されているという話だと思うので、ここは何か結構大きく分かれてくるところだなと思いますし、やっぱり私もなかなか想像できないのが、令和１０年度あたりが何か世の中がどうなっているのかというのがなかなか想像できないというところも難しくて、そういう意味では、ある意味何者でもなれるという意味では総合学科というのは一つの対応力の広さとしてはあるのかなというふうに思いながらも、一方で、総合学科というふうに銘打ってしまうと、多分周りの見え方からは、ここはもう進学ができない学校なんだというふうに思われてしまうような何か見え方もあるのかなと思ったりするので、その辺、一長一短ありながらですけれども、何かここは結構大きな分かれ目になると思うので、ここは今後の検討事項の一つかなというふうには思います。

○会長

ありがとうございました。

まずは、場所については、施設・設備のことがあるので、現在の工業の位置に設置してはどうかという御意見でした。

同時に、普通科系のと今まで言ってきたのを、総合学科という置き方をするか、普通科

でいくかみたいなことですね。それ結構、私も大事だと思うんですよ。周辺考えると、大田高校がありまして、それから浜田高校があるといったような、周辺の環境を考えたときに、ここを総合学科にするかどうかは結構大きな、それこそどっちに行くかみたいな話になってくるところがあるんですよね。この辺、少し御意見いただいたほうがいいかと思います。いかがでしょうか。

原案としては普通科系と書いておくという手はあるんですけど、ただ、それは時間延ばしの話であって、審議会の委員の意見の中からは総合学科を押す声があったとか、あるいは普通科系を維持するべきだという意見があったとか、そういう書き方になろうかと思いますので、そこのところ、もし御意見があればお願いいたします。

先ほどの表を見ていただくと、普通科系のほうには、看護・栄養・保育などの資格職を目指す進学コースというふうになっているので、いわゆる女子。いや、女子だけではもちろんないんですけども、地元の女子生徒なんかが一つの進路として積極的に選べるような場所というイメージで書かれているということで、こういう職業が女性のもんだというふうに申し上げる気はないんですけれども、相対的に今そこが多いですので、地元にそういう方が頑張って進学するというイメージがあるのかなというふうに思って拝読いたしました。

でも、一方で、おっしゃったように、総合学科とやってしまうと、今のイメージでは、進学したいんだったら浜田か大田になるのではないかと見えてしまうこともあるので、ここは十分に気をつけなきいといけないところなんじゃないかという御指摘でした。

○委員

総合学科というと、やっぱりまだ全然保護者の中で認識が薄くて、うちの娘、邇摩高校だったんですけど、総合学科だったんですけど、この学校、何を目的にやっているのかなというのが最初、入学当時は思ったんです。うちは１年生のときには共通の学びをして、その１年生の後半ぐらいから選択に移るんですけれども、また２年生になってまた選択肢、３年生になったらまた選択肢という形で学んでいったんですけれども、結局、やっぱりきちんと明確にしないと、本当にこの学校は何というふうなことになってしまうので、大学進学するという意味では、私はもう普通科というのが一番いいかなとは思いました。

○会長

総合学科の非常に難しいところを今、突かれているところですね。国のほうでは総合学科の推進を一生懸命言っているところがあって、その前提になっているところは、一人一

人の子どもが真剣に自分の進路を考えて、自分で選択していったり、自分でコースを選んでいくというところが売りなんですという話になるんですけど、じゃあ何でもできるのかと言われたら、何でもではないという制限もあったりして、そのはざまで結局、人が決めているような、自分で決めているような、そういう中途半端な状況になっていくようなケースがないわけではないというふうに思います。総合学科の弊害とまでは言いませんが、難しいところなんだと思いますね。

○委員

何学科ということではなくて、今、その普通が、普通って何か、みんな個人個人みんな違うわけで、生きているものみんな違うので、だから思い切って普通科という言葉から何かもっと違う、何か、科に変えてもいいのかなと思いました。

○会長

一応学校教育法にある中で決めないといけないので、そうなるんですけども、命名としては考えられるなというふうに。

今、○○委員に言われて、思ったんだけど、邇摩が総合学科があるんですよね。大田は普通科で、浜田が普通科でよろしいんですよね。近辺の学校ということになると、そういう分布ということになりますよね。で、ここに何を置くかという話ですね。

さっき○○委員さんが、令和１０年度にはどうなっているか分からない、一番分かりそうな企業に勤めておられるんですけど。

どうしますかね、何かこの辺、御意見があればお願いいたします。

○委員

ちょっと悩ましい問題ですね。どういう看板掲げるかということで、看板と中身との関係で、僕もよく分からないんですけど、生徒を集めるためには、やっぱり進学、普通科という看板を掲げたほうが生徒は集まりやすいのかなというふうに思っています。やっぱり総合学科というと本当に何をしているのか分からない、外部から見ればよく分からないというところはあって、どっちかというとモラトリアムコースというようなイメージがあって、よく分からない。僕は、工業科があるんで、やっぱりそれと対比する形で普通科といったほうが中学生には分かりやすいと思うんですね。対外的なメッセージとしては、工業科もありますし、進学もできますよということですので。総合学科というと、何か非常に、一方は工業で一方は総合学科ですということになると、非常に進学というイメージが薄れるわけですね。そうなると、やっぱり非常に生徒を集める上での競争力がなくなる。近く

に浜田があって、しかも江津には石見智翠館という強力なライバルがいるので、やっぱり普通科という看板を掲げたほうが、競争力はどうしても、募集力というかね、から見れば、普通科という看板を掲げたほうがよりベターかなというふうに思っています。総合学科だと、一方は工業、一方は総合となると、じゃあ進学はどうなんかというやっぱりイメージ、子どもたち、中学生に与えると思うんですね。そうなると、大田に行ったり、そういった危険性、まあ、危険性というか、そういったことも考えられるので、だから看板上は一応普通科と、入ってみればいろんな選択肢がありますよといったほうが、募集力という面では普通科と掲げたほうがより無難だというふうに思っています。

○会長

おっしゃいますように、普通科と言ってしまったほうが競争が厳しい気もするんですけどね。それこそ周りに進学するところはたくさんあるのでということになるので、難しいところはあると思いますね。

総合学科と普通科と、両方置くわけにいかないですよね。せっかく２学級あるからなと思ったりしたんですけど、まさかそうはいかないですね。

○委員

先ほどの話で、工業系の学びに興味があるんだけども進学したい人がどこを選ぶかなというところで、普通科というものの名前にやっぱり進学ということがついてくる。だから、進学を考えるんだったら、工業に今は興味があっても普通科を勧めるというふうなことになるんじゃないかなということを懸念していて、先ほどの工業なんだけども大学とか進学にするという子どもたちをどう工業の中に入れつつ、普通科ということの進学の魅力を残していくというところで、すみません、答えではないんですけど、懸念事項というか、ここを普通にしてしまうと、工業のほうには、特段、進学を考えている人たちを取り入れることが難しくなるんじゃないかというところです。それは、何かその下の科の中に何とかコースという、この名前で子どもたちにメッセージを送ることが十分にできるのかというとこかなと思います。

○会長

そこがコースになるか、先ほどの議論の中でも何回か出てくるんだけど、いわゆる進路指導の中で専門性を学びながら、さらに高いところを目指そうという気持ちが起きてきた子たちに選択できる授業科目等があるというようなつくりにするのか、その辺がコースで分けて人数張りつけるかどうかみたいなところの問題ですよね。その辺りが、工業の中に

も進学コースがありますよというふうなつくりにするかどうかという、そこの辺りですよね。

どうしましょう。普通科系の学びで置いときますか。

これこそはやっぱり地元の意見も聞いてほしいなと思うところですよね。今、地元の方もおられるけど、直ちに自分の判断だけでは多分おっしゃりにくい面もあると思うので、それこそ子どもの意見を聞いてみたり、地元の方の意見を聞いてみたりという、そういう意味で、この審議会の中ではどっちでいくべきだという議論はちょっとやめておいて、普通科系ということで、少し総合学科も含めてウイングを残しておくという形にしましょうか。

もちろんここでの判断でもいいんですけど、両論あると思いますので、やっぱり地元の意見を大切にという角度で、ここは普通科系ということで残させていただきたいというふうに思います。ありがとうございました。

そうしましたら、設置の場所については、特段にほかの意見がありませんか。

ただ、設備については、今、前回の議論の中で、工業にも女性用の部屋もありますよというお話を聞いたんですけど、ただ、普通科で、あるいは総合学科で女子の進学を考えるときには、やっぱりそれなりのスペースなりそれなりの施設改善が必要になると思いますので、あと、当然ながら、統合というか、統合新設ということになった場合には、それなりの施設の設備を充実させていただきたいということは申し上げればいいんじゃないかなというふうに思います。

その他のところ等もありますが、皆さん、御意見はいかがでしょうか。

一応これでこの３枚物を御覧いただいたという、今、地元の意見をどうこうの話は、４番のところに私は触れたつもりなんですけれども、それを置いた上で、もしここまでで一応ディスカッションが終わったというふうに考えてよろしければ、答申案の概要をお示しして、今日御意見をいただき、修正したものをまたメール等で御審議いただくという形になろうかと思いますが、次の段階に進めてよろしゅうございますでしょうか。

そうしましたら、事務局のほうから答申（案）を配付いただきますようお願いいたします。

事務局からの御説明でもいいですが、これ答申原案なので、私のほうで全文読ませていただきたいと思いますが、よろしゅうございますか。概要を説明していいですかってわけには多分いかないので、全文読ませていただきます。

答申原案です。本審議会は、令和５年８月９日に島根県教育委員会より、江津地域の県立高校の今後の在り方について諮問を受けた。その後、地域関係者からの意見聴取などにより、江津高校、江津工業高校それぞれの高校と地域との関わりや子どもたちの学びや活動状況、人材育成の視点からの地元産業界のニーズなどを把握し、これまで４回にわたって県教育委員会が示した「基本的な方針（案）」に対する議論を重ねてきた。

江津地域においては、現状において、市内の私立高校のほか、通学の利便性などから浜田市など他地域の高校に進学する生徒が一定数あるなど、中学生の進路の選択肢が多い。こうした中で、今後、さらなる少子化が進み、県教育委員会が示した推計のとおり中学校卒業者数が減少すると仮定すると、江津地域の子どもたちの教育環境の維持、進路の選択肢の維持するためには、令和１０年頃を目途に江津高校と江津工業高校の２校を統合し、新たな魅力ある高校を設置することが望ましいと考える。

そして、この新設校設置に向けた方針の議論の過程において重視すべき点は、現在の江津市内中学生の進路選択における普通科へのニーズの大きさと、県西部における工業人材を育成するための工業科の重要性である。

これらを満たす大きな枠組みとして、新設校における学科と学級数及びそれぞれの定員を以下に提示するということで、本日の３枚物の２ページ目の原案の案２のほうの表をここに入れさせていただくという形になります。

次のページに参ります。なお、この新設校は、県内初の普通科系の学科と工業科が統合する高校となる。また、地元の島根職業能力開発短期大学校（ポリテクカレッジ島根）や島根県立大学との連携を生かすことや、教員配置の充実等により、これまで以上に先進的で魅力的な学びが実現できる可能性がある。県教育委員会が今後、教育課程等の具体的な検討を進めていくに当たっては、上記の枠組みに加えて以下に示す視点を考慮することで、新設校が地域や中学生にとって、より魅力的で生徒一人一人の「なりたい自分」をかなえる高校になると考える。

括弧が１、２、３、４とございます。

まず、（１）ですが、県内初の普通科系と工業科が併置された高校ならではの魅力の検討。ポツが１、２、３、４、５、６個あります。１ポツ目、Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０に対応した魅力ある学科、コース名を検討する。検討することという意味ですね、検討。それから、ポツの２番目、生徒の主体的な選択の幅がある教育課程の検討。３番目、単位制や総合学科など、多様な学びのニーズへの対応を検討。４ポツ目、探究活動や課題研究などに

おける、学科間での授業の相互乗り入れ。５ポツ目、普通科系の生徒が工業科の資格を取得。６ポツ目、工業科の生徒が普通科系の生徒と共に進学を目指す。

（２）です。（２）は、地域や近隣教育機関との連携による魅力的な学びの検討ということです。１ポツ、２ポツとあります。１ポツ目が、島根県立大学やポリテクカレッジ島根との連携を深める。２つありまして、１つは、探究活動や課題研究を連携・協働して行うことで、地域が必要とする知識や技術を身につけようとする意欲を醸成する。それから、２番目は、先行履修や入学前単位取得、入学枠の確保による進学意欲の醸成。２つの学校にそういった先行履修の仕組み、入学前の単位取得の仕組み、あるいは入学枠を確保するというようなことを設けてはどうかという提案です。それから、２ポツ目、コンソーシアムを通じた幼・小・中と連携した探究活動の広がりということでございます。

それから、（３）です。生徒一人一人への指導・支援の充実ということで、学びを充実させるための専門性を備えた常勤教員の確保、それから、支援が必要な生徒に対する教育内容・方法の充実。

（４）として、その他。今後の検討においては、地域や中学生の意見を丁寧に聴取すること。２ポツめ、開校までの間、または開校後であっても、地域や社会のニーズを捉え、時代に合った魅力ある学びとなるよう柔軟に対応し、必要があれば方針等を見直すこと。

最後の文章ですが、このたびは、今後の中学校卒業生数の減少が著しい江津地域において、子どもたちとって望ましい教育環境を将来にわたっていかに維持・向上させることができるかについて議論してきた。しかしながら、少子化の進行は島根県全体が抱える課題であり、今回の議論は今後の島根県全体の高校教育についての多くの示唆を含むものであったと考える。

県教育委員会においては、この答申を踏まえて今後の検討を深めていただくことを期待するとともに、魅力ある高校づくりが魅力ある地域をつくることにつながっていくことを期待するものであると。

最後に、Ｓｏｃｉｅｔｙ５．０という言葉を使ったので、そこについての説明が最後についているという形になってございます。

以上、読み上げさせていただきました。

本日の時点で、修正や、ここはちょっととか、あるいは書き足すこと、あるいは書き落とすこと、ありましたら御指摘をお願いします。いかがでしょうか。

○委員

ありがとうございます。もう、ほとんど、何かすばらしい答申原案だなと思いながら見ていたんですけれども、最初の１ページのところの下のほうにあります、そして、この新設校設置に向けた、重視すべき点はのところで、それぞれ普通科と工業科に対しての検討すべき観点みたいな話があると思うんですが、何かその前に、何かもし入れられるのであれば、やっぱり、例えばですけども、本県がこれまで積み上げてきた探究的な学びを最大限に生かすことみたいな、その探究というものが普通科系にも工業にも両方に係っているんだみたいなことがあったほうが、２枚目のところで探究という言葉は何回も出ているので、分かるといえば分かるんですが、いいのかなというふうにはちょっと思ったというところの意見でした。

○会長

ありがとうございます。これまで島根県が特色として取り組んできた地域探究みたいな、そういったものについての取組を生かしながら新設校をつくっていくという、そういうニュアンスのものを入れてはどうかということなので、そこは少し事務局に御検討いただけたらいいんじゃないかなというふうに思います。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

一応、多分この答申原案について御意見いただいて、修正した後に、恐らくかなり早い時期で答申を申し上げる形になろうかと。この後のほうが大変ですからね、そういう意味で早くに答申を差し上げたほうがいいんじゃないかというふうに思っておりますので、この機会が恐らく最後になりますので、皆さんのほうから御意見をいただければありがたいと思います。いかがでしょうか。

○委員

なりたい自分を追求できるだとか、一人一人の子どもの支援というか、すごく個に特化した学びが得られる学校になっていくんだなというところが分かるんですけども、この具体的に何をするかというところは、この答申に含めるような詳細ではないですか。この後、議論していけば。

○会長

それが（１）、（２）、（３）、（４）のところなんですが、確かに抽象度が高いのは高いですよね。

なので、この抽象度、でも、例えばポリテクとか県立大学とか、固有名詞も出てくるので、具体の項目で皆さんがこれを入れといたほうがというのがあれば、それを入れたほう

がいいんじゃないかなと。もちろんこの答申どおりにつくられるかどうかは、これは県の御判断なので分からないんですけども、入れたいものがあれば入れとくほうがいいと思いますので、おっしゃってみていただければ。

○委員

何か例えば、せっかく新しく施設をつくるというところの要素があるので、例えば今、ジェンダーレストイレだとかというと女性を引きつけるというところもありますし、新しくそういう、今、女性のトイレがなかなか入りたくなるような施設じゃないというような現場の御意見もいただいたので、どうせつくるんだったら、何か例えばそういう性の多様性というところに関して、すごく私たちは受入れ体制がしっかりしていますっていうメッセージを送ることで、ほかの学校との差別化を図るというようなことができたりだとか、先ほどの地域がいろいろ、住んでいるところが離れているので、そういう子どもたちをどういうふうに取り込むかというところで、私立高校がバスで回るというような話があったんだけども、じゃあうちの高校はどうしていくのかというような案があったりだとか、あとは家庭で学ぶだとかというところで、なかなか人数が少ないので、地域の、学校に附属の学びのほかの施設というところも、そういう設置が難しいとしたら、じゃあ学校でどういうふうに対応していくのかだとか、何かそういうような形で個のニーズにどうアプローチしていくかというところの充実さを売りにする学校というところで、ほかの普通科よりはうちを選んでくださいっていうような、そういうメッセージの出し方もあるかなと思っています。

○教育長

今の件ですが、江津だけ見るとそれでいいんですけど、私の立場で言いますと、全部の公立高校でそういう理念は共通していると。ただ、施設的に全部を共通にいろいろできませんけども、理念的で言いますと、どの高校も皆同じ方向、その件に関しては同じ方向を目指しているという立場でございますので、そこはちょっとお許しいただければと。

○会長

大きくは生徒一人一人への指導・支援の充実とかということの中だけど、ジェンダーフリーとかそういうところについて、少し現代的な言葉を入れたほうがキャッチーなんじゃないかという御提案だったんですけど、そこのところはそれこそＳＤＧｓの一つの目標、誰一人取り残さないという目標の中にもありますので、今、教育長がおっしゃったように、それは全高校について言えることだよというお話だそうです。

ただ、〇〇委員言われた中で、地域の通学事情の問題とか、あるいは学習保障の問題が少しあって、これは特有でもないけど、一定程度必要なところがありますよね。だから、これは、この答申の中に盛り込むということよりも、やっぱり通学のことで、それこそ地域にある私学さんにあまり負けないようにというか、そういうこともあるかもしれないなと思いますね。

それから、塾とか、そういった、隠岐なんかではそういうふうに塾も公設で置いたりしているところがありますから、そういった学力保障の問題なんかも大事だというふうに思います。これは答申に入れるというよりは、意見として記録の中で残させていただければというふうに思っております。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

一応この答申案で、大きな意見がなければ、先ほどちょっと〇〇委員からあった意見を少し、県のこれまでの特色ある教育の取組として頭に置かせていただいて、２つの科を新設するというようなところに結びつけていただくという、そういうお話が一つ提案がありました。

ほかによろしいですか。

そうしましたら、この答申原案でお認めいただいたということで、事務局のほうから少し、先ほどの点も含めて調整を一度していただいて、各委員の方に御確認をいただきたいというふうに思っておりますので、その手続を進めていただければというふうに思っております。